

○名古屋女大家政 横山 寿子

日本女大家政 佐々井 啓

現在の既製服時代の到来を触発したのは19世紀後半から20世紀にかけてのアメリカの大衆社会である。衣服の生産は家内製手工業から工場生産へと劇的に変遷し、飛躍的に大量生産が推し進められた。これまでの研究では、大衆と既製服の結び付きが不明瞭である。

したがって、本研究では、大衆の衣生活の経済的な側面をとらえ、既製服と消費者の密接な関係を統計的、数量的な面から論証する。但し、男女用途別に比較すると、産業史では男性用衣服産業の先駆的な発達が通説とされ、本研究でも男性用衣服に着目する。

〔方法〕まず、当時の販売されていた衣類を調査するため、一般大衆を対象とした新聞「The New York Times」の企業公告欄を1851年9月から1900年12月まで丹念に調べ、衣類項目別に価格をグラフに示す。同時に、当時の衣服産業に関する資料を収集し、シャツ産業、注文仕立て産業、既製服産業についてまとめる。又、国勢調査統計表及びマクミラン世界歴史統計より衣服産業の企業数や生産高、物価指数や賃金指数等の基本資料を集積し経済史における当時の衣料費とともに統計的なアプローチを加える。

〔結果〕男性用既製服産業は1840年代にシャツ産業から始まり、ズボン産業、スーツ産業へ部門が広がる。この時期は、産業がまだ発展していなかったにもかかわらず、経済的には裕福であった。そのため、価格は景気と連動した波形を描く。好景気には価格の幅を広げ、不況の際には安価な既製服の需要を増す。このように、既製服は中級以下の衣類に始まり、大衆の需要が産業を発達させ、低価格と品質の向上を導いた。それが、やがて上層へ浸透し現在の既製服時代を築いたと言えよう。